

1年生初めの 定期考査前後の意識付け

時期の特徴

高校生としての学習スタイルを身に付けさせる時期。成績が下位層に固定化してしまうとばん回が困難なため、特に秋までは成績を大きく落ち込ませないように指導を続ける。

指導のポイント

入学時に説明した学習の取り組み方や1日の過ごし方が定着しているかを具体的に検証させ、生徒自身に改善点を語らせることで、自立的な学習者へと育てる。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

目的別データ活用

1 時期ごとの指導のポイントを共有する

……→ 図1

◎近年の新生は教師が考えている以上に基礎学力や学習習慣が定着しないまま入学してくるようだ。学年目標を達成するための時期ごとの目標や、声掛けはどのようなものであるべきか、新生の様子が見えてきたこの時期に図1を用いて学年全体で目標と指導ポイントを改めて共有する。

2 生活面も含め生徒の状況を把握する

……→ 図2

◎学年目標と生徒の現状とのギャップを数値化して把握するため、生徒が高校生活のベースに慣れてきた時期に図2のようなアンケートを実施する。調査項目は図1で確認した時期ごとの指導のポイントを基に作成する。学年目標を達成するために日々求められる具体的な行動を、教師と生徒双方が確認する機会となる。

3 学年全体とクラスの特徴を合わせて把握する

……→ 図3

◎図2のアンケート結果は図3のように学年全体、クラス別に集計する。担任はクラスの課題を把握した上で、日々の声掛けを行う。学年全体の状況に対してクラスがどのような特徴を持っているかを明確にし、担任が当事者意識を持って自分のクラスの課題解決に取り組んでいくための資料としたい。

対教師へのデータ

成績下位層に定着させないために
目標と実態のギャップに基づき指導を構築

データを用いた指導の流れ

4月頃

◎図1を使って、学年目標を見据えた時期ごとの目標や、指導のポイントを目線合わせする

中間テスト終了時

◎生徒が気を抜いている時期に、あえて実態把握のアンケートを実施(図2)。折線グラフを作成し、クラスの実態を把握する(図3)

1年生秋に向けて

◎図3から、自クラスはどんな要素が不足しているのかを客観的に捉え、秋以降に向けて学年目標実現のための手立てを考える

1年生秋

◎図2のなかで継続して取るべき項目は残し、他の部分は1年生秋頃の目標に合わせて項目を変更

図1 学年目標を踏まえた月別目標合わせシート

学年目標 規則正しい生活を送りながら、自ら学ぶ姿勢を持って計画的に学習に取り組めるようになる。

月	目標	行事	指導ポイント
4	中学生から高校生へ	学習合宿	・とにかく自学自習をやってみよう
5	連休でばん回!	新人戦	・予習の負担から解放される分、連休中に普段の遅れをばん回しよう
	先生を利用しよう!	中間考査	・質問するクセを付けよう!
6	行事からの切り替え	文化祭	・3年生の背中を見てどんな高校生になりたいか考えてみよう
7	高校生に変身完了	三者面談	・家に帰ったら着替える前にまず机に向かおう ・どんなに疲れていてもとりあえず30分は勉強しよう

図3 クラスの達成状況を確認

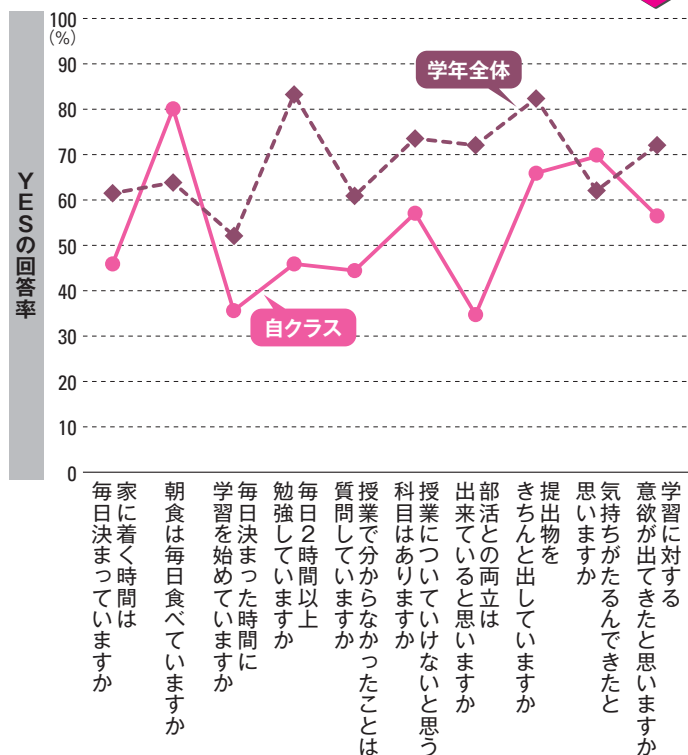


図2 中間考査明けの生徒状況把握アンケート

YES / NO で回答

質問	回答欄
1 家に着く時間は毎日決まっていますか	Yes
2 朝食は毎日食べていますか	No
3 毎日決まった時間に学習を始めていますか	Yes
4 毎日2時間以上勉強していますか	Yes
5 授業で分からなかったことは質問していますか	No
6 授業についていけないと思う科目はありますか	No
7 部活との両立は出来ていると思いますか	Yes
8 提出物をきちんと出していますか	No
9 気持ちがたるんできたと思いますか	No
10 学習に対する意欲が出てきたと思いますか	No



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

学年団の生の声で指導のポイントを見直す

図1で記載されている指導のポイントは、年度当初に作成した指導計画などから抜き出すことも可能だが、学年団が「日々生徒と接していて感じること」「もっと生徒にこうあってほしいこと」などと生徒の実態を語り合い、それを言葉にしていけば、より納得感のあるものとなる。教師の日常的な気付きを大切にしておくことで担任団の結束も強くなり、学年力が高まる。

自校の導入期の特徴を言語化する

「中学校の貯金だけで勉強を乗り切っている生徒は、10月には成績が大きく下降する」「学年によってキーとなる教科は違う」など、「この高校ならではの導入期指導のポイント」を学年団で明確に言語化することが重要だ。特に赴任歴の浅い教師には見通しを持った指導を行うためのよりどころとなるだろう。

クラスのリーダーとなる上位層を育てる

高1の前半は、クラス内での学習・生活状況の差を出来るだけ少なくすることが重要だ。そのため、担任の目は下位層へと向きがちになるが、上位層に対しても、全国の生徒の様子を紹介するなどして、刺激を与えていきたい。クラスのリーダーとなるよう上位層を育て、クラスを牽引する役割を担わせたい。

目的別データ活用

1 全体成績から今の自分の位置を確認させる

……→ 図4

◎定期考査の結果が出揃ったら、早い時期に面談を行いたい。生徒が最も関心を寄せているのは、学年やクラスの中での自分の位置である。中学校の頃とは順位が大きく変わり、動揺している生徒もいる。生徒には、図4を用い客観的な事実として自分の位置を示した上で、今後具体的に何をすればよいかをアドバイスしていく。「結果に一喜一憂するよりも、この時期は学習習慣を固めることが大切」「秋までに学習スタイルを作っておけば3年間の土台となる」など、視線を先に向かせることで前向きな緊張感を持たせる。

2 学習状況を「ありのまま」記録し原因を探らせる

……→ 図5

◎客観的なデータで生徒に現在の位置を示す際には、必ず「なぜ今その位置にいるのか」、そして「これから何をどう学習していけばよいか」を共に考えるようにする。例えば、定期考査の2週間前から学習記録表(図5)を付けさせておけば、学習時間が不足している教科は一目瞭然であり、テストの結果の原因を探ることが出来る。学習記録表に学習内容を具体的に記入させたり、授業中のノートやテストの答案を面談に持参させたりして、秋までに学習習慣の改善点を具体的に示したい。

対生徒
への
データ

「ありのまま」の学習履歴を基に面談し、
生徒自身に改善点を発見させる

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎面談などで <u>図4</u> を使って生徒の成績が学年のどの位置にいるのかを確認させる	◎ <u>図5</u> からどうしてこのような成績になったのか原因を探る。個々の生徒の学習時間や学習方法を把握し、具体的にアドバイスする	◎生徒が現実を前向きに捉えられるよう、「まだばん回可能」なことをしっかりと伝える。補習などで学習方法を身に付ける場を与える	◎ <u>図5</u> を定期的に確認し、生徒が指導通り学習に取り組んでいるか観察する

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトをご覧ください。

- 2006年2月号
- 「新入生への意識付け」
- 2008年4月号
- 「1年生を高校生にする意識付け」
- 2009年4月号

「高校生としての学習習慣を新入生に定着させる」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用 クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

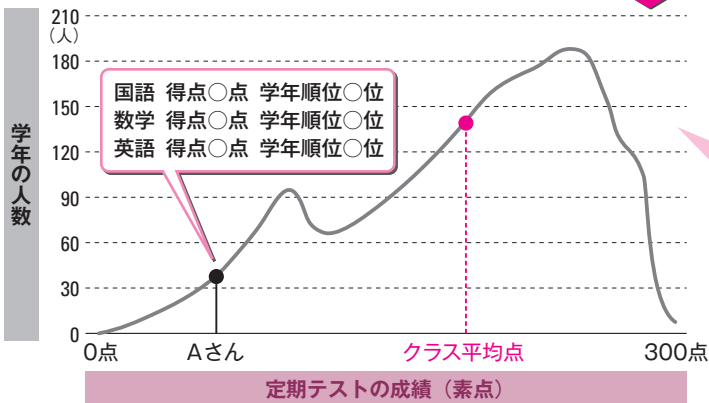
加工可能な資料が
ダウンロードできます!

生徒指導・
進路指導ツール集

ウェブサイトから

ダウンロード!

図4 学年成績と個人成績（度数分布）



指導のポイント

- ① 度数分布を何教科の成績で作成するかは、その高校の指導方針によって決まってくる。国数英の3教科で示したり、特定の教科に絞って作成する方法もあるだろう
- ② 成績下位層の生徒にとって上位との差は教師が考える以上に大きく開いて見えるものだ。平均点をグラフ上に示すなどして、この時点ではまだ集団から大きく遅れているわけではないことを伝えるようにする
- ③ 成績上位層には現在の成績に安住することがないように、弱点教科にしぼったアドバイスや模試成績と絡めた指導を行う

図5 「ありのまま」を書かせる学習記録表



中間考査までの目標 国語、数学、英語は毎日必ず30分以上勉強する

日(月)	時間	1	2	3	4	5	6	7
		1日(月)	////	////				
2日(火)	時間							
	学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 国語教科書音読、古文単語学習(30分) ● 英語単語学習(30分) ● 数学教科書演習問題(1時間) 						
3日(水)	時間							
	学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ● ● ● 						



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

生徒自身に語らせることで意識を高める

面談は生徒とのコミュニケーションであり、生徒自身に悩みや決意を語らせることが重要だ。「勉強しておきなさい」では生徒は動くことが出来ないし、教師との関係も築けない。課題のある教科のどこが分からないのか、自分はどうしようと思っているのかをまず生徒自身に語らせることから面談は始まる。生徒の発言を踏まえて具体的なアドバイスへ移りたい。

教科担任との連携でより具体的な内容に

面談の前に生徒に「苦手科目を今後どう勉強していくか、教科担当の先生に相談しておくように」と指示を出す。そして面談では教科担任と話し合っただけの学習計画を説明させる。担任も教科担任と事前に打ち合わせを行い「勉強のしかたが悪いのか、学習量が足りないのか」などのポイントを生徒に示すように依頼するとよい。

生徒の学習の「伴走者」となる

特に下位層の生徒には、面談で学習計画を示すだけでなく、教師が見守る中で実際に学習を体験させる機会を作ってやりたい。計画した学習量をこなせたら毎日そのノートを担任に提出させるなど、学習が軌道に乗るまでの「伴走者」を務める。中学時代に家庭学習の経験が少ない生徒は、途中で迷うこともある。そんなとき担任がそばにすることが支えになる。